

## 「内なる他者」を見つめる目

秋 山 幹 男

The Eye to Look at “the Others inside Myself”

Mikio Akiyama

### は じ め に

平成7年度の公開講座は、心理学の4人の教員が担当した。期間は、9月30日より11月11日までの計6回であった。この時スタッフは、30歳代、40歳代、50歳代、60歳代ととても面白い関係にあった。そこで、この年齢構成を生かしたテーマ選びに入り、「こころ」を見つめる目に統一し、肩の力を抜きながら、自分達の到達している考え方を話してみようという結論に達した。

キーワードは、「人生における臨界期——人生の節目や曲がり角——」というかなりエキサイティングな、ちょっと目新しい用語を創作してみた。半年の期間を置く中で、各人が付けたタイトル等を紹介してみよう。9月30日（第1回目）は、「こころを見つめる目」についての概観とし、コオディネーターの秋山が、パネルディスカッション形式で進行させた。その内容は、「臨界期」という用語の説明と、この発見のもとになったローレンツの紹介（ビデオを見ながら）をし、その後4人の教員が話してみたい内容について、20分程度の解説をした。

10月7日：有馬比呂志（30歳代の目）「からだから見た心」

10月21日：田頭穂積（40歳代の目）「人生のターニング・ポイントから見た心——記憶力をリフレッシュする——」

10月28日：秋山幹男（50歳代の目）「内なる他者を見つめる目」

11月4日：藤土圭三（60歳代の目）「老いゆく目から見る心——ホスピスを中心に——」

最終日の11月11日は、「人生における臨界期」とし、4回のまとめと各人の補足説明の後、参加者の質問に対する4人の見解を述べた。概して好評のうちに終了することができ、ホッと胸をなで下ろしたものである。

### 第4講のスタート

公開講座用のパンフには、以下のような説明文を付けた。

人間は、一人で自分の人生を創り上げることは不可能だし、一人では生きていけない。私達はあまりにも当たり前になりすぎて、気付かない大事なことが身近にあったはずである。私なりに人間的成長をなしとげられたのは、その時々によくの人々との「かかわり」があったからである。具体的な短編・エッセイなどを参考にしながら、この「かかわり」における<sup>こころ</sup>（いま、ここで）の大切さを共有しましょう。

この講演の録音テープをおこし、加筆修正を加え、論文調に改め直したのが本論文である。近年、心理学では応用分野の臨床心理学が隆盛を極めつつある。ここまで導いてきた立て役

者の一人に、河合隼雄がいる。彼は、ユングの理論と sand play technique (箱庭療法) を1965年に日本に持ち帰り、以後30年の間心理療法の面で活躍をしてきた。今も現役の療法家として有名である。彼が紹介してきたユングの個人心理学の中に、「共時性 (シンクロニシティ)」というキーワードがある。この共時性というのは、客観的にみた場合、本来まったく関係のない現象なのだけれど、そこには不思議なかかわりがあるという捉え方をする。自分から見ても相手から見ても何か不思議な縁がある。若い時ならば、恋人同士の赤い糸といってもいいような何かが、そのかかわりの中に生じてくるのである。ユングの紹介している話を例にして述べるならば、ある日、治療中の女性が前の晩にみた黄金のスカラベの話をしているときに、ユングの背後の窓にやさしい羽音がしたのである。それは、なんとスカラベに似た甲虫であった。このような意味のある一致は、たましいの深い感情的レベルに触れるものと彼は考えたのである (Bolen, J. S. 1987)。

スイスに生まれ、スイスで治療し、スイスで自分の人生を終えたユングでも、その晩年になるまではあまりこのキーワードを世に紹介しなかったようである。ところが日本では、昔から「因縁」といったような使われ方がなされてきている。

### 不思議な出会いのあれとこれ

今日は、このような不思議な話を展開させていきます。一週間前にホーソンの短編「人面の大岩」の抜き出しと、松久朋琳のエッセイ3編 (「自分に似る」「偶然と必然」「修正できない芸術」) を配布し、一読をお願いしました。この資料をどう読むかが大きな狙いの一つになっていきます。それらがどういう関係になるのか、お聞きください。

筆者は、13歳の頃に「人面の大岩」に出会っている。それは、中学校の国語の時間にである。他のことはほとんど覚えていないのだが、この作品はしっかりと頭の中にインプットされたのである。しかし、20歳代後半になるまで作者不詳のままであったが、自分の心を人に話す時、この作品のことをよく口にしたものである。この大学に赴任したのは、1972年のことである。その最初の頃に一人の尊敬する先輩 (教授) に出会えたのである。その方は、社会学とドイツ語を担当しておられた中井虎一氏である。それまで心の中で温め続けていたこの短編の著者を御教示くださった方なのである。

赴任後1・2年頃には、教員と学生が寝食を共にする一泊研修会があり、あるグループに所属したのです。そのメンバーの一人として、中井教授もおられました。いつものように「この話の作者は分からんのだが、これこれという話。山がでてくるのでスイスかもしれない……。僕の心を作り上げたのはこの物語なのです」

その時でした。教授は、その作品を書いた人がアメリカの作家ナザニエル・ホーソンであることを話されたのです。その会が終了すると、すぐに本通りに出かけ、何軒か本屋をはしごしてやっと手に入れました。それが、お配りした抜き出しの原本 (角川文庫) なのです (1958)。 —ナザニエル・ホーソン1804-1864—

この本は、間もなくして絶版になった。北大の柏倉俊三 (1898生) の訳で、とても興奮した。30歳になろうとしていた時の想いがたくさんの線を引かせている。今ならば、そこには線を引かないであろう。52歳になった私は、この作品をどのように受け止めているのだろうか。3つのエッセイの著者である松久朋琳は、明治生まれの人でもう他界している。彼は、76年間仏像

を彫り続けた。彼の本（1985）には、40歳を過ぎた頃に出会った。今から3年前、京都で学会があった折りに、彼が生前生活していた九条山の家まで足を運んだ。電停のすぐ側にあったが、空き家となっていた。その後、息子の宗琳氏の建てられた「松久仏像彫刻会館」を訪れた。この建物は、本能寺がある通りを南に下がったところにあったが、宗琳氏もその年の3月に逝去されており、彼の娘さんが引き継いでおられた。

松久朋琳のエッセイとホーソンの「人面の大岩」の主人公アーネストが、筆者の中でどのように結びついていくのだろうか。その接点は、『「内なる他者」を見つめる目』である。この目とは、「私」のことであり、「われわれ」のことでもある。さらに、付け加えたい二人としては、1901年生まれの本学園の創設者武田ミキと、もう一人同じ年に生まれた光岡始がいる。光岡氏は、この大学に70歳前後に赴任し、10年位勤務した美術の教授である。この二人の登場によって松久朋琳の考えがうまく結び付いていくはずである。アーネスト・松久朋琳・武田ミキ・光岡始と今日の著者との出会いを支えているキーワードは二つ、『一言』と『包容』である。

皆様をこの場所にお招きするに当たっては、私達4人と学生がいつも前日に掃除しております。これは武田ミキから受け継いだ精神なのですが、これは形からの準備でもありませんし、また同時に心の準備でもあるのです。

生前の武田ミキは、熱っぽく語り続けた。「自分の考えている教育とは、“心から心”であるが、それが出来にくい世の中になってしまった。だから、まずは“形から心へ”“心から形へ”そして最後の目標として“心から心へ”を目指したい」この考え方は、『心を育て、人を育てる』という本学園の教育方針として結実化している。彼女は何度も死線をさまよったが、その都度奇跡のカムバックをしてきた。しかし、残念なことに1993年12月27日に92歳で亡くなられた。29日に告別式があったのだが、不思議なことが起こるものである。当日たくさんの献花が捧げられた。式が始まり、少し時間が過ぎた頃一羽の蝶が飛来し、目の前の花に止まったではないか。確かに温かい日ではあったけれど、その年も押し迫った29日のことである。その時素直な気持ちで「あー、ここにミキ先生と私がいる」と感じていた。

ミキを長年支え続けてきたもの・言葉は、一体どのようなものであったのだろうか。武田学園創立35周年記念誌（1983）に載せられた彼女の自伝の中に、その言葉はあった。誕生の後次いで両親が他界され、姉の手で育てられたのであるが、その折々に姉は「しっかりやれよ。何事も真心こめてやれよ」と語りかけられたようである。この言葉が、92年の人生を支えたのである。尋常小学校に上がられたら、一人の尊敬できる先生井上マツヨ氏との出会いがあり、教師になる夢がめばえていく。そんなある日、それは修身の時間であったが、上杉鷹山の銘言が耳に飛び込んできたのである。「為せば成る。為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」この一言が、80年の人生を支えたともいえようか。

自分とか自分の周りの人を見つめていく時に、二つの見方があるように思う。それは一体どういう事なのだろうか。52歳になった今、いろいろな事柄が結び付いてきている。これは自分の人生を生きてこられた方々が、考えた事、行き着いた事とはほぼ同じものだと了解している。

24年前に会うことが出来、その後の私の18年間を支え続けてくれた光岡氏について少し触れておきたい。退職後も西条に住んでおられたのであるが、ある日何気なくテレビのスイッチをONにしたら、西条の町の紹介番組であった。画面に登場しているのは、何と光岡氏であった。80歳半ばの先生が、西条の町に咲いている花をスケッチしている場面であった。（この絵は、後にお寺の天井画として40数枚日本画で描きかえられ、寄進された。）たまたまつけた時、パッと出たのがなんと光岡氏であったという訳である。これも共時性なのだろうか。最後に、

西条の小学生が、「光岡先生は私達の宝物です」と締めくくり、その番組は終了した。光岡画伯と筆者にまつわる話とは、以下のようなものであった。私が30歳になった頃、国鉄可部駅（当時）から二人で根の谷川の土手を通して大学にいく時の先生の言葉なのである。「秋山君、生きるって素晴らしいね。見てごらん、空は生きてるよ。雲を見てごらん、雲も生きているよ。山を見てごらん、山も生きているよ。川を見てごらん、川も生きている。木を見てごらん、木も生きている。草を見てごらん、草も生きているのだよ。『生きる』って素晴らしいね！」22年たってその言葉が、私の頭のなかで（心の中で）実を結び始めだしている。探し求めているライフ・ワークの種は、この出会いの中で、この言葉の内に蒔かれていたのだと思う。画伯は、88歳で他界されたが、私のために残して下さったようなこの言葉は、しっかりと心の中で根づいている。先生との思い出としては、もう一つ大切なものがある。可部線の三滝で下車し、山の方に足を進めると、三滝寺に行き着く。鐘つき堂から約10mくらい登った所で、目を左に向けると二つ仲良く並んだ石碑がある。「若楓 瀬音の高き 三滝寺」という彼の俳句に、譜面が付けてある。とてもユニークなこの一對の石碑は、小さい流れともみじの茂る場所に置かれているのである。その句は、俳句仲間であった住職との歓談の折りに誕生したものである。学生と共に私も同席させてもらった。5月の爽やかな風が新緑のもみじの葉を揺らし、せせらぎの音が耳に心地よい。その雰囲気の中で話された住職の話が忘れられない。「君達、君達がこの世に生まれた確率が何ばか知っとるか。それは、3億分の1ぞ！」この言葉が、見事に「生きるって素晴らしいね」の一言と結び付いたのである。

## 二つのこころの見方

筆者は、小・中・高・大学・大学院で20年近い学びをしてきた。今に結び付く挑戦が失敗だったとは思わないけれど、随分と危ない取り組みだった。その当時、もう一つの心の存在に気が付いていなかった。それは、とても大きな包み込みであったし、それこそが二つ目のこころだったのである。私という存在を支え続けたものがそれであった。その流れは、生まれた時いやこの地球上に生命が誕生して以来延々と続いているものなのである。この事に気付かれた人は過去現在にわたり、随分たくさん数のにのぼるであろう。筆者もその現象に目が向きつつあるのだが、まだたんなる「頭の思い」でしかないのかもしれない。

ここでもう一人、内なる他者化した内山興正老師に登場願い、彼の言葉で説明したい。「頭の思い」と「<sup>なま</sup>生の命」がそれである。30歳の頃には全く分からなかった事なのであるが、52歳の今ではやっと理解しかけてきている。学生時代は、大変であった。心理学について学べば学ぶほど、自分の中に迷いが生じてきた。学問としての学びというよりは、生き方の材料に置き換えて聴いていたからである。例えば、クレッチマーのことを学べば、三つの気質が体型と高い相関があり、これは精神的病いの三タイプに関係づけられている。この成果は類型論の研究からであったが、そこに出てくる性格特徴は、どれかが自分のものと重なってくる。これを、「頭の思い」だけで受け止めると、怖いことになることがある。しかし、そんな時にも私を後ろから支え続けてくれていたのが、彼の言う「生の命」なのであった。私は、しっかりとその心によって守られていたのである。20歳前半頃、老師が朝日新聞の日曜版に書いておられた、沢木興道についてのエッセイに意気投合し、沢木老師の講話全集を購入しよくは分からないのに読みふけた。

26歳の頃、広島市内の禅寺に内山老師が来られた折りには、一泊座禅会に参加した。朝

のお勤めの後、住職の庫裡でお話を聴き、一冊の著書を頂戴し、さらには「京都に遊びにおいでなさい」と言ってくださったのである。28歳で結婚したが、本当に二人で京都に出かけた折りに、アポイントも取らず安泰寺を訪れた。雲水の方が出られ、来意を告げました。老師は昨晚帰寺され、また明日の朝出かけられるという、たった一日の安息日であった。その時の雲水は、今も老師のお世話をしておられる櫛谷老師ではなかっただろうか。冷たいお寺の水で点てていただいたお茶は、とても美味だったし、お話の内容は今でもしっかりと記憶している。

禅宗の開祖は、達磨大師といわれている。彼はインドから中国に入り、北魏の少林寺に足を止め山に籠った。その達磨のもとを尋ねた人に慧可がいる。彼は、二祖となり禅の悟りを引き継いでいく。その流れが代々引き継がれ、現代の一つのそれは道元……沢木・内山・櫛谷とつながっている。筆者が26歳の頃に戴いた老師50歳頃の著書は、自分の意志で絶版にされ、新たに80歳前に「御いのち抄」を出され、お教のスタイルで世に語りかけている。曹洞禅では、ただ座るだけ、只管打坐の世界。頭の思いではない、生の命の世界である。

### アーネストと松久朋琳

人面の大岩の主人公アーネストは、その盆地で昔からインディアン<sup>インディアン</sup>の伝説として伝えられている話を、まだ幼い頃母から教えられる。その山の側面には、大きな岩がデコボコしているだけなのに、ある距離をおいて眺めると人間の顔に見え、しかも莊嚴で慈愛に満ちているように思える。母の伝説の話は、いつの日にかこの地からあの人面の大岩に似た人が出てくるというものだった。アーネスト坊やは、「その人に会いたい」という強い感動に包まれる。それは、生の命から出た言葉であった。母は、愛情細やかな考えの深い人だったので、子どもの強い希望を殺さないようにするのがよいという気持ちから、ただ一言「きっと会えましょうよ」と答えたのである。

ホーソンは5歳の頃、父が客死してしまい、その後は、没世間的な母親のもとで育てられた。そういう雰囲気の中で生活し、大学に入り、親友と出会い、かつ素晴らしい女性と結婚し、60歳で人生を終える。

この物語は、アーネストの人生の節々で盆地出身の偉人に出会っていくのだが、彼の心はいつも失望と新たな希望で織りなされていく（子どもの頃、若者の頃、中年、そして老年期を迎えてしまう）。彼は、毎日の仕事を努めると、いつも大岩と会話をしてきたのだけれど、目立たない人ではあったが、さりげない奉仕を続けてきた。そのうち、そんな彼の人柄に触れたい人々が彼の家を訪ね、素朴なアーネストの話に耳を傾け、温かい思いに包まれながら帰途につく。その折り、フツと大岩を眺め、どこかでそのような人物に会ったように感じるが首を傾げる。そんなある日、一人の詩人が盆地のアーネストを訪ね一夜の宿を乞う。アーネストはいつものように外にでて大岩と対面しながら、一冊の本に目を落としていた。その本の内容は、詩であった。いつになく大岩の顔がニコニコしているように感じている。そこに町からやってきたのがその本の著者である当の詩人で、彼もこの盆地の出身者であった。すぐに二人の会話が始まり、どんどんと深まりながら、お互い今まで到達したこともないような精神的境地に入っていく。「その詩を書いたのは自分だ」と詩人が述べた時、アーネストは大岩を眺め彼と見比べ少し暗い顔になる。詩人もそのことに気付いたので、「あなたは、私があの人面の大岩に似

ているように思っておられたのではないかと話し、「私には似る資格はない。それは、神に近いような詩は書けても、私の生活はそうではなかったのです」と述べた。つまりは、言行不一致であったことを吐露するのであった。アーネストは、いつものようにみんなの前で自分の話をする時間になったので、詩人と共に大岩が後ろに見える場所に出かけ、大岩に背を向けて話し始める。先ほどの精神的高揚の状態の内にあった彼は、一つの言葉がのどもとまで出かかるが、うまく表現できない。そんな時間の流れの中に身を委ねながらとうとうその言葉が口からはとばした。夕日を浴びたアーネストと大岩、その瞬間詩人が声を上げたのである。「見よ！彼こそ人面の大岩にそっくりの人ではないか!!」しかし、話し終えたアーネストは、これから偉人に出会うことを期待しながら、家路につくのであった。

ここで筆者が言いたいのは、詩人と年老いたアーネストの出会いとは、一体どういうことなのかということである。この精神的境地は、日本という国に生まれ育ち、76年間仏像を彫り続けた松久朋琳がエッセイの中で述べているのとまったく同じ内容といっても差し支えない。

四季折々の風情を肌を感じながら、この仕事部屋で今日も私は頼まれものの可愛らしい阿弥陀様に刀を加えております。のみを打つ音、木の香りに誘われるように、ボチボチとここを訪ねて来る人もあります。皆悩みを持っておられます。生きがいを求めています。私は何も申しません。ただ、お茶を飲み雑談を交わすだけです。それでも皆さん何かを得たという顔で安心して帰って行かれます。この間ある大学の先生に、この仕事場を将来は老人を含めた一般の人達に開放して、お互いの話合いの場にしたらどうでしょうかと言うてましたら、その先生も大いに賛成してくれました。自由な気持ちで訪ねて来てくれはる。お茶を出す位で何の接待もしません。そのかわり会費も取りませんという主義です。私にとって人に会うという事は、仏に会うという事と同じ意味です。明日会う人との出会い、その必然を大切にしようと思うとります。(松久 1985 p.138・9より)

アーネストは、母の一言を深く心にとどめ、日々農夫としての仕事に励みつつ徳を積み上げていく。毎日人面の大岩と対話し、いつのまにか天使とささやき合っているという噂が広まっていったのである。52歳の筆者は、人間は神ではない、また、神になろうと考えるべきではないと思っている。人間は、アーネストと詩人との出会い、松久朋琳の境地こそがたどり着く最高のところではないだろうか。言行一致の言霊を口にしたその瞬間においてのみ、アーネストは大岩に似たのである。それまでもどこかで大岩に似ている人に会ったと来訪者に思わせただが、まだ雰囲気としての彼の存在感がそのように受け止めさせたと言えるのではあるまいか。

### 「自分をつくる」がなぜ山なのか

禅寺を訪れると、「看脚下」とか「照顧脚下」という字に出会う。禅のこころの一つの到達点を表している真実の言葉の結晶である。武田ミキが生前の折りには、この大学も上履きで教室内・廊下を歩いていた。トイレに行くときも、もちろん履きかえる。後の人が履きやすいように整えてから自分の上履きに戻るのであるが、つい急いだりして乱したままという学生もいた。そんな折りには、ミキは直ちに言葉を掛けていた。また、そういう状況に遭遇すると、必ず腰を屈めつつかけを並び変えておられたのである。挨拶にしてもそうであった。キャンパスで出会う人はみんな知合い・お客様・ご縁のある方なので、丁寧に頭を下げ、声をだすように語られ続けた。“形から心へ”“心から形へ”そして“心から心へ”の精神は、日常生活における足もとから禅の到達した悟りの境地まで、幅の広いそして奥の深い内容を秘めたものであっ

た。先生70歳から92歳までの長い付き合いによって、私の中の大切な他者と化していった。

学生時代は、聞き上手であった。と言うよりは、あまり話すべき内容を心に持っていなかったのが必然的に聴く側の立場になっていただけかもしれない。それが幸いして、お年寄りのお話を聴くのが楽しみでもあった。そのおかげでミキ先生からもたくさんの人生勉強をさせてもらえた。年を取られた方の話は、4・5時間位たつと、「若いのによう聞いてくれたのー」と言われ、その後その方が生きてこられた人生を語り始められる。これは、その方の「生の命」の声であった。私が13歳の時出会った「人面の大岩」（当時の記憶では作者不詳）も、この「生の命」がそうさせたと思っている。その心で触れたため、それからは山を仰ぎ見る習慣が付いてしまった。そしてとうとうキャンパスから見える阿武山（586m）にこころ引かれ、その近くに居を構えてしまった。

山もまた内なる他者化しているのであるが、他にも山が大切な存在となった人に40歳後半出会うこととなった。その人の名は、臼井吉見。彼は戦後長いこと筑摩書房の編集長を勤め、自らも3000頁以上の長編小説「安曇野」を書き上げた。明治時代から第二次世界大戦の終わりまで、実に1000人以上の人達を登場させている。彼の郷里は、信州の安曇野・堀金村であった。彼は「自分をつくる」という文庫本を出しているが、その中に山がでてくる。北アルプスの山で、その地域の方々がこよなく愛している山、それは常念岳（2857m）である。私も会いにでかけた。九条山に松久朋琳の住んでいた家を訪れたその年である。臼井の「自分をつくる」という話は、信州大学附属中学校創立20周年の記念講演の講師として招かれた時のものである（彼62歳頃）。彼の母校でもあるが、昔の校名は松本中学校。その講演の中で「人生—精神の世界—」について、後輩に話しかける。

人生とは何かと言う時に、私達は暮らし向きの実生活と精神の世界を持っていることに気付かなければならない。暮らし向きの実生活がなければ生きてはいけませんが、これだけでは人生は出来ない。もう一つ必要なことは精神の世界です。精神の世界というと、特別な難しいもののように考えてしまうけれど、そんなものではない。そこにきれいな花が咲いていたら、「きれいだなー」と思う心。山があったら、「アー 素晴らしいな」と思う心。昨日と今日の山は違うなと思う心。これがみんな精神の世界なのである。（臼井 1986 p.20-22 の要約）

では、どうしてこの世界が彼の中に芽生えたのだろうか。堀金村の堀金小学校時代の3年生から6年生までの校長は佐藤先生であった。月曜日の朝礼の話題は、いつも一つだけ。それは「常念を見ろ」「常念を見よ」であった。常念を見ろという意味は、尋常小学校の子ども達には分らない。しかし、「今日は元気がいいぞ」「今日はニコニコ笑っているぞ」「常念を見ろ、今日は曇って見えないぞ」「常念を見ろ、雪が積もっているぞ」ということは理解できた。その内子ども達の間で流行はじめたのが、常念小学校何年何組という使い方であった。臼井は、その折りに心のなかに、それまでは知らなかった精神の世界というものが、うっすらしていたかもしれないけれど、とにかくできた、植え付けられたと言う。

我々は、暮らし向きの実生活をベースにして、自分独自の精神の世界を紡いでいく。

私は、阿武山を見ると手を合わせる。その理由をうまく述べることは出来ないのだが、幼児期の頃から随分と信心深かった。今でも有難い事と感謝している。

## 「父の一言」とその後の一言・一事

ここからは少し、幼い頃から私を支え続けている『父の一言』と、大切な方々との出会いについて話しておきたい。

私が生まれたのは1943年です。昭和18年日本はミッドウェイ海戦に敗れ、その後ドンドンと敗戦の色を濃くしていったころの誕生です。食べるものにも困り、空襲警報発令のサイレンの合図で防空壕に入らなければならない時期がすぐにやってきました。広島に原爆が落ちた時は、1歳11カ月でした。広島県の西の端にある大竹に住んでおりました。当時父は、その町にあった海兵団に所属していたのです。私の幼年時代（小学校にあがる前のこと）は、朝鮮戦争勃発直前でした。4・5年前に落とされた原爆以上の兵器が開発されつつありました。それは水素爆弾です。5歳前後の私はその恐ろしさを思い、涙をよくこぼしたものです。そのころは、オーストラリアの兵士は帰国し（間違っているかもしれませんが）アメリカの兵士が隣の岩国に駐留しており、私達はその人達を進駐軍と呼んでおりました。その頃も私達は飢えた生活が続いておりました。いつも腹がすいた状態でした。（今思いだしてみたら、母は強かったのですね。そういう時にもなんとかやりくりしながら、毎日食べさせてくれたのですからね）そんな頃の話です。

ジープに乗って進駐軍の人がやってくると、ものすごい数の子どもがワッと群がる。幾重にも取り巻いているので、なかなか中へ割り込めない。強い者勝ちの世界である。輪の中で彼ら（アメリカの兵隊さん）がすることは、ジープの上に立ち、葡萄なら一房をバラバラにして、パーとばらまく。チューインガムの場合は、袋から中身をだしバラして投げる。それを拾うわけであるが、私は拾うことができなかった。人をかき分け押し退けるだけのバイタリティがなかった。ショボく来て家に帰ったその姿を見、私の話を聞いた母は怒った。「つまらん子じゃね。拾えなかったんか」（多分そのような言い方ではなかっただろうか）。母の気持ちは、今なら分かる。美味しい物を食べさせてやりたいが、それができない台所事情があったのだから。

たとえ喉から手がでる位ほしい物でも拾えないものは食えない。弱虫の子どもに与えてくれる者はいない。仕事から帰ってきた父は、その話を母から聞き、私に向かって一言言った『おまえは偉い』。幼い子どもの心（頭ごなしに怒られた4・5歳の）は、渡りに舟、父の方にすがりつく。『お前は偉い。拾わんほうがいいんだ』と言われたら、その言葉を掛けてくれた人に傾く。ここから筆者の人生（精神の世界）が始まってきて、13歳でホーソンの「人面の大岩」に出会い、その前後にたくさんの恩師に助けられ、内山老師の人柄に惚れ、その延長戦上にミキ先生・光岡先生との出会いが待っていたのだと考える。

小学校5年生の時の担任だった福地喜久子先生（故人）、麦のたくさん入った弁当を食べる前に、両手を合わせ親指と人差指の間に箸をおいて、毎日唱和した。「箸とらば、雨土みよの御恵み、父母や師匠の恩を味わえ!」

中学校3年次の担任永谷 豊先生（国語）、学年一問題のあるクラスだった（と思っている）が、そんな我々に対し、恩師は放課後毎日目を閉じさせ、4・5分の間に皆を落ちつかせてから、漢字の書取りをされた。そんなある日、一人のクラス仲間がツツツカと教壇の前に歩みより、先生の目の前で握り拳を振り上げた。我々は皆、彼が師を次の瞬間殴ったと思った。しかし、先生は避けることもせず、そこにいた。師の目の前ギリギリの所で彼は止めたのである。その一事で、その一瞬で全員先生を尊敬するようになった。3



学期の終わり頃には学年一のいいクラスに変身した。握り拳のSが、卒業後クラス会の幹事になった。

高校1～3年の担任は生物が専門の石橋基二先生、2年次から理系・文系・就職に分かれて授業がなされたけれど、クラスはそのまま維持されショートホームルーム等は石橋ルームでなされた。3年間師は、5分程度の話をズーッとしてくださった。中味はなんとも思い出せないが、師の考え方は染み込み、私の思考回路はこの時出来上がった。

大学時代も素晴らしい先生方に恵まれたのだが、ここでは酒井行雄教授（故人）との思い出を語りたい。先生のお人柄とその博学さに引かれ、アポイントを取り厚かましくもよくお宅へ伺った。その折りの話なのであるが、お茶とお菓子をもってきてくださった奥様に話された私についての一言が、いまの学者としての私を支えている。「秋山君は創造力のある学生で、私は期待しているのだよ」（多分そのような内容の話であったと思う）。

そして広島文教女子大学で、心の祖父母となった1901年生まれのお二人の師と出会ったのである。

私の心は、山を見ながらたくさんの尊敬する大切な方々と触れ合い、そのお一人お一人の一言・一事を取り込んでいった。今はみな血肉化している。求める気さえあれば、かかわりを持てた方々の心が染み込んでいく。これは、当然の帰結であろう。最も近いところでの出会いであり大変感謝している人としては、「武田ミキ人間教育論」をミキ先生91歳の誕生日に発刊させた倉田侃司氏（現広島経済大学教授）がいる。この本の出版にあたっては編集長を務め、筆者が担当した第二章 めざす人間像 を書き上げるに当たっては、いろいろな助言指導をしてもらったのである。曲がりなりにも本原稿を書くことが苦にならなくなったのは、彼のお陰なのである。

### 「精神の世界」が行き着く二つの例

さて、ここで再び精神の世界に話をもどそう。ここまでは、白井吉見の考え方で論を進めてきたが、これからは仏教の話に結びつけてみたい。禅の流れは口伝または体得という悟りの形態を取っている。それが脈々と受け継がれ、現在のその一つが内山老師と櫛谷老師で体現化されている。ズーッとつながっており、切れてはいない。道元禅師が懸命に修行を続け、書きまとめた「正法眼蔵」は、日本における最高の財産の一つであり、日本人の魂となっている。

池見西次郎氏は、もう九州大学医学部を退職されて長くなるが、在職中には日本で初めての心療内科を開設された人である。彼は、生まれた時にはもう父と生き別れの状態であったと述べている。母親一つの手で育てられたのだが、母から親離れするのに60年位の人生をかけたとも本に書かれている。若かりし頃の池見氏は、次々に患者さんを自宅に預かり、一緒に生活をしている。当然の事、家での世話は奥様とお母様の担当が主である。そういう苦勞をし、悶えながら心療内科の形態を作り上げた人物である。彼には3人の「心の父」がいると言う。大学時代の小野寺 直助教授と日本における精神分析の開拓者である古沢平作氏（この方は、直接フロイドについて学んだ後、東北大学の医学部で助教授となり精力的に仕事をしていたのだが、ある出来事をきっかけに一開業医として精神分析を広めていった）。もう一人の心の父は、当時の文部大臣であった荒木万寿夫氏である。この大臣のお陰で初めて心療内科が認可された。

この中の古沢氏と医学博士でありながら天才的漫画家となった手塚治虫の仏典に対する解釈の違いを述べてみたい。

手塚治虫は、我々にとっては懐かしい「鉄腕アトム」の産みの親であり、不朽の名作漫画をたくさん残し、晩年に近い頃には「火の鳥」「ブッダ」という作品を世に出した。

池見の「自己分析」という本の中に『無根信』についての物語が、古沢の業績と関係づけてでてくる。それは、仏典に登場してくるアジャセの物語である。インドにお金持ちの王がいた。たくさんのお后の中に、年を取り自分の美貌の衰えを気にする人がいた。彼女は、予言者に相談を持ちかけ、3年後に〇〇仙人が死ぬがその生まれ変わりとして后のお腹に宿ることを告げる。美貌の衰えが進む中とうとう待ちきれなくなって、頼んでその仙人を殺してしまう。確かにお腹の中に宿ったのではあるが、その予言者はその時を待たない場合にはその子が愛する国王を殺すとも予言をしたのである。そして、子を孕んだ時に王の足を嘗めなくなるなるだろうと告げる。まさしくその通りの気分となり、恐ろしさのあまりわが子が生まれおちた時、その子を塔の上から投げ落とした。だがその赤子は死なず、王の手に渡り一粒種の男の子として可愛がられるのである。しかし、予言どおり父である王を、ダイバダックに唆され、幽閉し食事や水を与えず死ぬのを待つ。王を愛する後は、体に蜜をぬって塔にでかけていく。それに気付いたアジャセは、その行為を止め、母までも殺そうとした。年老いた忠臣ギバの諫めで母殺しはしなかったが、父である王は他界する。父である王を殺し王位に就いたアジャセではあったが、後悔の念にさいなまれ、とうとう全身に瘡毒が現れ、高熱と臭気の中で悶え苦しむ。戦いにおける傷が膿んでいったのである。今でいう心身症かもしれない。

仏典ではギバが、釈尊のもとに出かけ救いを求めるように勧める。夢に出てきた父が、天の声として「お前を救えるのは仏陀であり、彼は祇園精舎にいる」と伝える（直接仏典からその箇所を探そうとしたのであるが、いまだに見つからず、今回は、池見氏の本から借用した）。かくして、アジャセ王は救われる。

手塚の漫画「ブッダ」第8巻祇園精舎では、この場面がかなり違うように描かれている。仏典とは異なる物語が展開していく。ダイバダックも出てくるし、もちろんアジャセも登場する。瘡毒にも触れているが、その病の後を頭がすごく腫れている状態で描く。ブッダは、忠臣の案内で王に会うが、それから毎日12時間もアジャセ王の額に自分の指を当て続けた。3年間も。その場面に続けて王がニコッと微笑むカットがある。その微笑みに気付いたブッダの顔。「3年間毎日12時間続けてきたかいがあった！あの微笑みは何だ。まるで神様のようではないか。エッ、神だって……？なんたる事だ、そうだ今分かったぞ。人間の心の中にこそ神がいるのだ。神が宿っているのだ!!」この語りが手塚治虫のたどり着いた境地を表していると思う。当時のインドは、カースト制度が厳しく身分差別があった地域である。そのような社会認識の中で、「みんな同じなんだ。神は一人ひとりの心の中に宿っておられるのだ」との解釈を持ち込んでいる。これは、仏典にある言葉で述べるなら『無根信』。アジャセは、生まれた時から母親に疎まれた。王である父は、彼を大事に育てただけけれど、予言通りに殺されてしまう。さらにアジャセは、母をも殺そうとした。そんな悪魔のような自分の心にさいなまれ続けたのであろう。

一方、池見の本では以下のような記述がなされている。

若い古沢平作先生は、フロイトのもとで学んだ精神分析の治療法をもとに、4年間精力的に治療が続けていた。そんなある晩、当直の日にはノックする音がする。入ってきた自分の患者が、「先生を殺したい」と言ったのである。猛烈に燃えていた古沢氏は、驚きかつ冷水を浴びせられたようになっていた。その時から古沢先生の苦悩が始まっていく。その彼がたどり着いたのは、西洋の精神分析ではない、日本の精神分析。それも仏典の中にあ

るアジャセの『無根信』に基づいたキーワード“アジャセ・コンプレックス”であった。  
(池見 1968 p.164-166 の要約)

『無根信』とは、何だろうか。伊蘭という毒樹の実からは、伊蘭の樹がはえる。それなのに、伊蘭の実のようなアジャセの心に、香わしい<sup>せんだん</sup>栴檀の樹のような、信仰が芽生えた。この信仰が生まれたのは、まさに根のないところに生えた樹のようなものだというところからきている。

手塚治虫は、毎日12時間しかも3年間指を当て続けたというストーリーに創り上げて、その結果がアジャセ王の微笑みを引き出したと解釈している。これは、彼がたどり着いた一つの悟りとも言えるのではないかと受け止めた。自分のような根も無い人間でも、神なる心は湧いてくる。毒の樹であったのかぐわしい香りが漂ってきた。その喜びを感じ取れたアジャセの国は、さらに盛んになっていった。

### 私とは何者なのだろうか

以上の話は、まさしく精神の行き着く世界である。ユングは、若い者の心の無意識に住まう年老いた偉い人、つまり『老賢人』を元型の象徴的存在と考えたのであるが、それと同じ考えのように思われる。森毅の言葉で述べるならば、「若い時から心に老人を住まわせてきた若者は、年を取って心に若者を抱えた老人になれると信じている」ということにも結び付いていくのではあるまいか。

自分の中の深い部分に存在する心、ユングの命名では『Self』である。暮し向きの実生活を支えている私の「私」。実に大切な「私」なのである。このところを内山老師の言葉で言うと、頭の思いではない今日も私（我々）を生かしてくれている心の存在、つまりは「生の命」：“生死ぐるみの命”ということになるであろう。

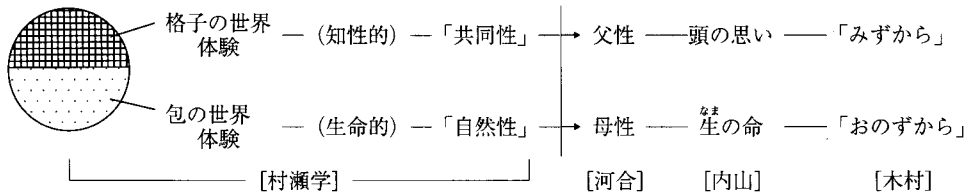


図1

図1の左端には、村瀬学の絵が描いてある。上の格子になっている部分と下の点々を打っている部分は、人間の発達に伴ってその比率が変わるという。彼は、現象学的に人間を見据えている。人間をジーンと見て、「人とは何か」ということで心の変化をこの絵のように表した。子どもの時には、下の部分がものすごく多い。ところが、教育を受けながら大人になっていくにつれて上の格子の世界が増えていく。もちろん、下の点々の世界が全く無くなるということはない。大人になった者は、自分の見ている世界が正しいと思っているから、この状態こそ成熟した人間の姿と考える。村瀬はこの事に着目し、さらにもう一回格子の世界と点々の世界が混ざり合うと考えている。人間としての陶冶・自分づくりには、もう一度混ざり合う必要があり、それを巴で表す。つまり、そこにこそ大人になってもまだ探し求める本当の成熟があるのだという主張なのである。格子の世界から覗いて見ると、確かに物がよく見える。それは、ブ

ラス・マイナス、明・暗、善・悪といった形での判断であり、今で言うサイエンス／教育なのである。この思考の仕方を、我々は学校で学んできた。ところが、「三億分の一の確率で生まれてきた」というもう一つの感じ方については、あまり追い求めてはこなかった。まずそこから始まった「自分の命」というもの、すなわち下の点々の部分・自然の中に包み込まれた「包の世界体験」こそが、生の命の出所なのである。上の格子の世界体験とは、知性的な体験であり、頭の思いの担当なのである。村瀬は、上の部分を「共同性」、下の部分を「自然性」と名付ける。

社会が作り上げてきた文化・財産を我々は身に付けなければ、人間としての生活つまり暮し向きの実生活はできないし、精神の世界も立ち上がらない。しかし、今一度この世界を支えているのは「自然性」であり、「生の命」であることを忘れてはなるまい。我々は、自然と共に助け合いながら生きていかななくてはいけない（『共生』）。そうでないならば、自分の首を締めるだけでなく、あらゆる存在物の首を締めることになるだろう。

これを、河合隼雄の言葉で言い直すと、母性と父性となる。日本の社会は母性社会であり、欧米のそれは父性社会である。この概念は、父性的なものと母性的なものと、言い換えれば、厳しさと甘さを表している。全体的に包み込むような対処は母性、厳しい一言を発するのは（その人の一生を左右するような）父性性に基づくものなのかもしれない。そうすると、アーネストの母が発した「必ず会えましょうよ」の一言は、父性性だったのではあるまいか。「人面の大岩」という短編に父は登場しない。自己流の解釈なのだが、アーネストが抱き続けた気持ちは、池見西次郎氏と同じで、自分の知らない父のイメージを人面の大岩に重ね、毎日毎日仕事を終えた時に対話するという生活を何十年も続けたのかもしれない。また、ある意味においては、松久朋琳とまったく同じような生活をしながら、アーネストは毎夕山を見続けたのであろう。大岩を仰ぎ見ながら、自分の心根を語ったのではあるまいか。だからこそ、彼は天使と話をして、そこから知恵を授かったという噂が広まっていき、少しずつ彼のまわりに人が集まるようになっていったのであろう。松久朋琳氏もそうである。残念なことだが、九条山の裾野にあった作業場を今まで以上にみんなが集まって、お茶を飲みながら話し合う場所にしようと思っておられたが、他界されてしまった。

精神の世界と暮し向きの実生活が微妙なバランスを取りながら、私達の人生は紡ぎあげられていく。そう考えると、有難いという気持ちになり、素直に手を合わせることができる。

ミキ先生も手を合わせておられました。先生は朝早く起きられて、東の方向つまり生まれ故郷の沼隈に向かって、物心のつく前に亡くなられた御両親に手を合わせる。「お父様お母様、助けてください。ミキはまだ死ねません、やる事があるのです」その後学長室に入られ、夜の10時まで仕事をされ、家路につかれた。筆者も時々8時を過ぎて研究室をでることがあったが、まだ学長室には電気がついていました。そこで、帰りの挨拶をしようとノックすることもありました。その折りにお話を聴かせていただいたので、他の先生が知らないミキ先生の一面を私なりに知っているという訳です。

精神医学者の木村敏は、「みずから」と「おのずから」を使い分ける。彼のライフワークのキーワードは、『人と人との間』。日本人のものの考え方の特徴として彼が取り上げた人と人との間という概念を、自己流に解釈してみると、これは霜山徳爾と結び付く。霜山氏は、「まわりに立ちこめた雰囲気」と「まなざし」について追究を深めている。木村の「みずから」と「おのずから」は、人と人との間に立ちこめた雰囲気であり、まなざしと言ってもそう違わないと思う。この思考の流れの中に、「内なる他者」と「内なる他者を見つめる目」は、位置づ

けられるのである。

## 母親との精神的和解

この考え方は、西平直（1986）をベースにしている。私にとっての「私」と「内なる他者」がそれである。この思考形態の中で、親子の似よりとズレという研究を24年間続けてきている。早坂氏の指摘にそうならば、女子学生や母親の感じた性格のイメージを調べているのだから、親子の似より感とズレ感とすべきであろうか。筆者の現在の関心は、心の内に取り込んだ両親のイメージを、我々一人ひとりがどのように定着させていくのかを探ることにある。

私は、父の方に寄っていく形で、自分の考え方や人生を作り上げ／紡いできた。物質面で母が私を生かしてくれたということは、よく分かっていたのに母に楯をつくことが多かった。もう随分と前に他界しているのだが、昨年11月末の頃、横山紘一の「十牛図の世界」を再読し、読み終わってふと前の出窓に目を移した。もう午前0時を過ぎていた。そこには、シャコバサボテンの鉢が置いてある。その植物は、17年前に母が大事に育てていたものである。これを持ち帰り、17年間少しづつ鉢を大きくしながら自分なりにズッと育ててきたのである。ふと眼差したその満開の花の中に母を見たのである。私は宗教家ではないので、顔が姿がありありと見えたとか、背後霊・守護神という言い方はしない。その時私に見えた／感じたのは、母の雰囲気だったのである。そのシャコバサボテンの花のまわりに立ちこめた雰囲気として母を感じ取ったのである。その花は、母が大事に育てていたものの一つであったからこそ出会えたのだと思う。51歳になってやっと巡り会えた実母の心であった。その時私は、素直な気持ちで自然のうちに合掌していた。

最後の締めに入りたい。「内なる他者」を見つめる目ということは、私の中に取り込まれた「私」。その心を作り上げるきっかけになったのは、5歳頃に『お前は拾わんでよかった。その方が偉い』と言ってくれた父の一言。これをベースにして、私はたくさんの人々との心の触れ合いをしてきた。そして、その Significant Others が、内なる他者化し、私は「私」の中で融合させ続けて来たのだと考える。また、51歳まで実感できなかったもう一人の親である母が、私をズーッと包み込んでくれていたことに気が付いた。温かさにも慣れすぎていて、その雰囲気に気付くことのなかった身の不幸を癒してくれたのが、24年前に結婚した妻であり、二人の大切な息子達であったと考えている。

実に不思議な事であるが、息子達の姿を見てみると、自分（私）の姿が、妻の心が浮きだして見えてくる。私の中に存在する親子の似よりとズレというものが、子どもの中にもまざまざと見いだせる。私と妻の半分づつの個性が形を替えながらも子どもの中に垣間みられると言った方がより適切かもしれない。私ではない「私」、でも私である「私」。だからこそそこには似よりとズレがある。ここにこそ、新しい命への『自己』の申し送りがあり、それが遠々とつながり合っていくのであろう。

ミキ先生の言葉で表すならば、「男の半円と女の半円が合わさって一つの円になる」である。サイエンス的に述べなくとも皆さんにはよくお分かりのことでしょう。

二十世紀と共に誕生され、この世に92年間も生きてこられ、我々を導いてくださったミキ先生のお考えに、私のような未熟者が付いていくのはとても難しい。だが、52歳になった筆者は、このように思いながら今を生きている。50の目から見た話は、全て「人間と人間との間の関係

性」に集約できるのではなからうか。

これで私の話は終わりとしたい。

追記：この原稿は、55歳になって手を加えたものである。それにしてもよくもここまで歩んできたものである。たくさんの出会いを私という心の中にとけ込ませ、融合させ、「私」として吸収できてきたことに対し、深い感謝の気持ちを妻と息子達、そして妻の母と今は亡き両親と岳父に捧げたい。

合掌。

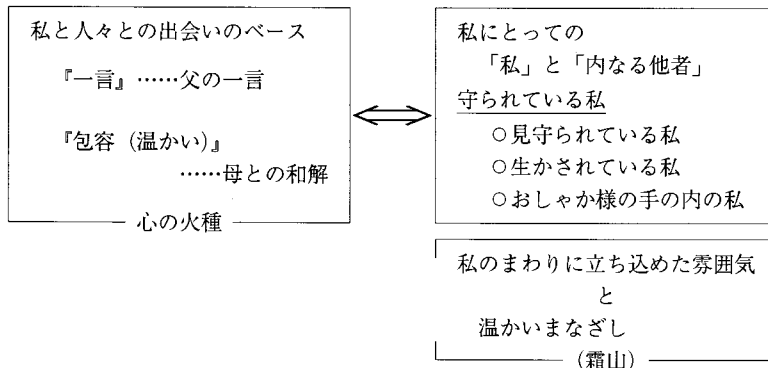


図 2

## 文 献

- 秋山幹男 1980 女子学生における自己と父母の認知について (2) —— 4 年間の縦断的研究 —— 広島文教女子大学研究紀要 XV 45-74
- 秋山幹男 1988 女子学生における自己と父母の認知について (5) —— 三者間の似よりもとづく分析 —— 広島文教女子大学紀要 (人文・社会科学編) 23 83-102
- 秋山幹男 1992a 親子の「似より」と女子学生の性格との関連 広島文教女子大学紀要 27 67-88
- 秋山幹男 1992b 親子の似よりと自己受容について——女子学生における理想自己と現実自己のズレ —— 広島文教教育 (広島文教女子大学教育学会) 7 29-48
- 秋山幹男 1992c 武田ミキ人間教育論 第2章 めざす人間像 広島文教女子大学教育研究所 45-75
- 秋山幹男 1993 教育相談について思うこと—「今、ここで」の大切さとは— 広島文教女子大学教育相談センター年報 1 32-45
- 秋山幹男 1994 「親子の似より」研究の現状とそのパースペクティブ 広島文教女子大学紀要 29 145-169
- 秋山幹男 1995 発達心理学からみた子どもの問題 (公開レクチャー講義録) 広島文教女子大学教育相談センター年報 2 9-27
- 秋山幹男 1996 幼教の想い出 幼児教育の研究 20 1-13
- 秋山幹男 1997 親子の似より (感) の推移について—女子学生を対象にした4年間— 広島文教女子大学紀要 32 149-163
- 栗津則雄選 1996 雪舟「慧可断臂図」—見通すまなざし— 毎日新聞 日曜くらぶ 2月25日
- ボーレン,J.S. 湯浅泰雄監訳 1987 タオ心理学—ユングの共時性と自己性— 春秋社
- 童門冬二 1983 小説上杉鷹山 上巻・下巻 学陽書房
- 藤沢周平 1997 漆の実のなる国 上・下 文芸春秋
- ホーソン,N. 柏倉俊三訳 1958 トワイス・ツールズ・テールズ:「人面の大岩」 角川書店 144-171
- 早坂泰次郎編著 1994 <関係性>の人間学——良心的エゴイズムの心理—— 川島書店
- 石田おさむ 1997 マンガ ユング深層心理学入門 講談社
- 池見西次郎 1968 自己分析 講談社

「内なる他者」を見つめる目

- ユング, C.G. 河合隼雄監訳 1972 人間と象徴—無意識の世界— 河出書房新社
- 河合隼雄 1967 ユング心理学入門 培風館
- 河合隼雄 1969 箱庭療法入門 誠信書房
- 河合隼雄 1978 ユングの生涯 第三文明社
- 河合隼雄 1980 家族関係を考える 講談社
- 河合隼雄 1992 心理療法序説 岩波書店
- 木村 敏 1972 人と人との間 弘文堂
- 木村 敏 1994 心の病理を考える 岩波書店
- 櫛谷宗則 1993 禅からのアドバイス—内山興正老師の言葉— 大法輪閣
- ローレンツ, K. 日高敏隆訳 1982 ソロモンの指輪—動物行動学入門— 早川書房
- 松久朋琳 1985 一心一仏—京仏師独り語り— 講談社
- 光岡 始 1984 画集 供華 ひとみ印刷
- 森 毅 1994 明るくうだうだ世紀末談義 毎日新聞 3月2日
- 村瀬 学 1984 子ども体験 大和書房
- 長尾雅人編 1969 世界の名著 1 バラモン教典／原始仏典 中央公論社
- 西平 直 1986 <私>をどう理解するか——H. フロンの<内なる他者>を手掛かりに—— 東京大学  
教育学部紀要 26 197-205
- 西平 直 1993 エリクソンの人間学 東京大学出版会
- 澤木興道 1962-1967 澤木興道全集第一巻～第十八巻 大法輪閣
- 霜山徳爾 1978 人間の詩と真実 中央公論社
- 武田学園 1983 武田学園創立三十五周年記念誌 第一法規出版
- 武田学千 1994 遺響 広島文教女子大学
- 寺田透・水野弥穂子 1970 日本思想大系 12 道元 上 岩波書店  
1972 日本思想大系 12 道元 下 岩波書店
- 手塚治虫 1985-1987 火の鳥 1 - 13 角川書店
- 手塚治虫 1988 ブッダ 第8巻 祇園精舎 潮出版社
- 内山興正 1969 進みと安らい—自己の世界— 柏樹社
- 内山興正 1990 御いのち抄 柏樹社
- 白井吉見 1986 自分をつくる 筑摩書房
- 白井吉見 1987 安曇野 第一部 - 第五部 筑摩書房
- 横山紘一 1987 十牛図の世界 講談社

—平成10年9月29日 受理—